



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義：小学校における実証的研究を通して(全文の要約)
Author(s)	山内,雅子
Citation	
Issue Date	2014-03-14
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/137751">http://hdl.handle.net/2309/137751</a>
Publisher	
Rights	

山内雅子博士学位論文

東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究所 学校教育学専攻

論文題目 伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義  
—小学校における実証的研究を通して—

本研究の目的は、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義を、小学校における実証的研究を通して明らかにすることである。即ち、日本語を話す日本の子どもにとって、日本語の音声表現を基盤とした声による歌唱指導が、どのような教育的意義をもつのかということ、音楽的成長、並びに人間的成長の側面から子どもの変容を通して明らかにしていくものである。

第1章では、日本の音楽科教育の歴史における児童発声の課題を整理し、日本の伝統的な歌唱の位置づけを明らかにした。日本の唱歌教育は1879（明治12）年、音楽取調掛の設置から始まったが、日本の伝統音楽と西洋音楽の本質的な差異を検討しないまま、安易に類似点を見つけて唱歌教育としてスタートしたところに問題があったことは周知の事実である。その流れの中で、1941年に国定教科書『ウタノホン上教師用』、並びに1947（昭和22）年度版学習指導要領（試案）において「自然な発声」が標榜された。この「自然な発声」は、日本語の音声表現を基盤とする点において本研究が目指す声と一致している。第1章では「自然な発声」に注目し、その本意が十分に理解されずに、児童発声の中心が「頭声的発声」に関する議論に変わっていった要因を東京高等師範学校附属小学校の訓導であった井上武士（1894 - 1974）の児童発声観を検討することにより明らかにした。その結果、「自然な発声」が定着しなかった原因として、次の3点が明らかとなった。

- ① 「自然な発声」が具体的にどのような声を示すのか提示されなかった。
- ② 指導の方法論が、明確でなかった。
- ③ 「自然な発声」のメカニズムについて、音声生理学的見地からの論理が展開されなかった。

よって、本研究において、伝統的な歌唱の声が具体的にどのような声であるかを、音声生理学的知見からも検討し、明らかにしていくことと共に、伝統的な歌唱の指導方法を、具体的な実践を提示しながら一般化して提示すること、更に、伝統的な歌を、日本語の音声表現を基盤とした声で歌うことが、子どもの音楽的成長、そして人間的成長にどのように寄与していくのかを明らかにすること、以上3点を3つの課題として提示した。

第2章では、日本語の音声表現を基盤とした伝統的な歌唱の声を、先行研究及び関連研究、音声生理学的見地、並びに音響学的見地から検討した。その結果、児童発声における伝統的な歌唱の科学的な解明はまだ未開発の分野であること、並びに音声生理学研究と音楽教育界では、用語の捉え方が異なっていることが明らかになった。伝統的な歌唱を生かした歌唱指導を3年間行っ

た子どもの発声時の声帯を観察したところ、どの子どもの声帯も大変美しく、「地声」で歌っても声帯を壊さないことが明らかになった。また、音楽教育界で「頭声」或は「頭声的発声」であると認識されている豊かな響きのある頭声的な発声時には、声帯全体の振動、或は声帯全体と声帯辺縁部の両方の振動が見られた。このことは、これまで音楽教育界では「頭声」若しくは「頭声的発声」と聴取されていた発声者の頭部に響く声も、音声生理学見地からいえば、「地声」の範疇に入ることを示している。また、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導を受けてきた子どもは、地声発声にみられる声帯全体のしなやかな振動と、ファルセットに見られる声帯辺縁部の振動をミックスすることで、地声発声に特有の豊かなフォルマントを有する発声法を幅広い音域の歌唱に生かしていたという可能性も否定できない。これは、僅か8名の声帯観察から得られた推論であり、この分野での更なる研究の充実が今後の課題として得られた。音響学的見地からは、先行研究並びに、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導を重ねてきた子どもの音声分析を通して、伝統的な歌唱の声には **singing formant** の成分の増大が顕著であり、びんびんと響く豊かな響きのある歌声であること、また伝統的な歌唱の声は、日本語の音声表現を基盤とした声であり、日本語を話す子どもなどの子にも容易に発声可能な声であることが明らかになった。更に、明治期以来批判の対象となってきた「怒鳴り声」「叫び声」と「伝統的な歌唱の声」はスペクトルの包絡が異なり、「怒鳴り声」「叫び声」は「伝統的な歌唱の声」とは別の声であることも明らかになった。

第3章では、伝統的な歌唱の指導の方法を、長唄《元禄花見踊り》を教材として取り組んだ事例を提示しながら一般化して提示した。具体的には、長唄のスペシャリストによる指導と長唄の経験のない音楽教師による指導の比較を通して、歌唱の到達度を統計的手法を用いて検証するとともに、スペシャリストの指導と児童の変容の観察を通して、一般的な音楽教師も、適切な音源を用いて、歌うときの姿勢と発声の仕方についてポイントを押さえた指導を行うことで、長唄の歌唱表現の指導を行うことができることを明らかにした。また五線譜を用いないことの重要性や音源を用いて作成する歌詞譜の有効性、更に日頃の合唱指導との関わりについても言及した。

第4章は、実践的展開のIとして、伝統的な歌唱の指導が子どもにもたらした音楽的成長について、実践の報告ならびに分析を通して明らかにした。実践事例1「初めての民謡の授業」(1999)は伝統的な歌唱に特化した内容、実践事例2「曲想を生かして歌唱法を工夫する授業」(2002)は、日本の伝統的な歌の声と、洋楽の様式でつくられた楽曲での声の使い分けを目指す内容、実践事例3「合唱部の取り組みを通して」(2003-2009)は、伝統的な歌唱と「自然で無理のない、響きのある歌い方(声)」を児童自らが工夫して自在に行き来しながら、児童の声と表現力を豊かに育てていく内容である。それぞれ、実際の授業の様子、子どもの声、指導により変容していく場面をDVD、並びにCD資料として添付した。

第5章では、伝統的な歌唱の指導が子どもにもたらした人間的成長について、実践の報告並びに分析を通して明らかにした。具体的には、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導と人間的な変容

と題して、いじめや学級崩壊、発達障害などの深刻な状況を有する学級が、伝統的な歌唱の取り組みを通して大きく変容し、一人一人の子どもが少しずつ自分に自信を持てるようになっていく過程を記述し、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義について述べた。また、教材、指導法以前に、子どもと対する教師そのものが、子どもにとって最も大きな影響を及ぼすことから、筆者の音楽授業の何が子どもの大きな変容をもたらすのかを筆者の授業記録を基に考察し、筆者の音楽授業の原理を明らかにした。その中から、子どもの活動を肯定的に評価する、授業準備のための労を惜しまない、年間指導計画、題材の計画、本時のねらいが明確であるという、教師に求められる当たり前の取組みを積み重ねていくことの大切さが改めて見えてきた。

終章、研究の総括では、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義についてまとめた。伝統的な歌唱を生かした歌唱活動は、他の曲種の表現にも生きて、子どもの音楽性や歌唱力を高めしていく。そして、日本語を話す日本の子どもならどの子にも容易にできる伝統的な歌唱を生かした歌唱活動は、子どもに自己肯定感や集団の所属意識を育て、健全な成長や、好ましい学級集団の育成に寄与することを述べた。

児童発声に関する音声生理学的な解明は、まだ緒に就いたばかりである。最後に今後の課題として、音声生理学の分野と音楽教育の分野が連携を図り、児童発声について科学的に解明していくことの重要性を述べた。

## 【資料】

### 目次

序章 研究の目的・内容・方法	1
0.1 研究の背景	1
0.2 研究の目的と方法	3
0.3 先行研究並びに本研究での用語の捉え方	3
0.3.1 「地声」の語義に関するもの	4
0.3.2 「声帯」の状態や波形から「地声」を考察している研究	4
0.3.3 本論文での用語の捉え方	5
0.4 論文の構成	7
第1章 音楽科教育の歴史における児童発声の課題	9
1.1 日本における児童発声の歴史の概観	10
1.1.1 戦前日本の児童発声とその課題	
— 児童発声論の成立から「弱声」そして「自然な発声へ」—	10
1.1.2 戦後日本の児童発声の流れとその中に見られる問題点	
— 「自然な発声」から「頭声的発声」そして「自然で無理のない声」へ	
	14
1.1.2.1 「自然な発声」	
— 昭和22年学習指導要領（試案）とその問題点	16
1.1.2.2 「軽い頭声で」	
— 昭和26年学習指導要領（試案）とその解説書にみられる問題点	16
1.1.2.3 「頭声的発声」	
— 昭和33年小学校学習指導要領—	20
1.1.2.4 「ひびきのある頭声的発声」の登場と定着	
— 昭和43年・53年・平成元年小学校学習指導要領—	21
1.1.2.5 「自然で無理のない声」	
— 平成10年・20年小学校学習指導要領	22
1.2 「自然な発声」観の要点とそこにみる課題	
— 井上武士の児童発声観を中心に—	23
1.2.1 それまでの発声指導に対する批判	23
1.2.2 井上の「自然な発声」観	23
1.2.3 井上の「自然な発声」指導	24
1.2.4 井上の「自然な発声」にみる調 i	25
1.3 児童発声の歴史的変遷にみる「自然な発声」がもつ課題	25

<b>第2章 日本語の音声表現を基盤とした声</b> . . . . .	<b>28</b>
2.1 先行研究及び関連研究 . . . . .	28
2.1.1 熱田研究に至るまでの児童発声研究の流れ . . . . .	28
2.1.2 熱田研究が示す教育的意義及び伝統的な歌唱の声 ～熱田庫康『声を使った表現活動を活性化するための指導方法の研究』 のレビューを通して . . . . .	29
2.1.2.1 熱田研究の目的 . . . . .	30
2.1.2.2 熱田研究の目指す伝統的な歌唱を歌う声と指導法 . . . . .	31
2.1.2.3 熱田研究の課題 . . . . .	32
2.2 音声生理学の視点からみた伝統的な歌唱の声 . . . . .	33
2.2.1 呼吸について . . . . .	33
2.2.2 洋楽発声と邦楽発声について . . . . .	34
2.2.3 声帯観察を通してみる伝統的な歌唱の声 . . . . .	37
2.2.3.1 音声生理学からみた声帯と声 . . . . .	37
2.2.3.2 子どもの声と声帯 . . . . .	38
2.2.3.3 子どもの声帯観察の所見と考察 . . . . .	39
2.2.3.4 音声生理学の見地からみた伝統的な歌唱の声 . . . . .	43
2.3 音響学の視点から見た伝統的な歌唱の声 . . . . .	44
2.3.1 中山論文のレビューを通して、伝統的な歌唱の音響特性を見る . . . . .	44
2.3.2 子どもの声の音声分析を通してみる伝統的な歌唱の声 . . . . .	45
2.4 本研究における伝統的な歌唱の声 . . . . .	48
<b>第3章 伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の方法</b> . . . . .	<b>51</b>
3.1 実践の概要と目的 . . . . .	51
3.2 研究の方法 . . . . .	51
3.2.1 対象者 . . . . .	52
3.2.2 指導者 . . . . .	53
3.2.3 教材と教材選択の観点 . . . . .	53
3.2.4 長唄らしい歌唱の到達度の評価 . . . . .	54
3.2.5 3学級の歌唱力の等質性について . . . . .	54
3.2.6 頭声的発声を身に付けた度合の評価の差について . . . . .	55
3.3 授業の実際 . . . . .	55
3.3.1 題材名「長唄に挑戦しよう」 . . . . .	55
3.3.2 題材の目標 . . . . . ii . . . . .	55
3.3.3 題材の指導計画 . . . . .	56

3.3.4	授業記録	56
3.4	児童が表現した長唄の到達度の評価	58
3.4.1.	長唄らしい歌唱表現の到達度について	58
3.4.2	評価に関して考慮すべき事項	59
3.5	長唄のスペシャリストによる授業の観察	60
3.5.1	スペシャリストの授業の観察と考察	60
3.5.2	有効であった指導のことば	61
3.5.3	長唄のスペシャリストの指導からよみとった、音楽授業における 長唄指導のポイント	62
3.6	一般的な音楽教師が行った授業の工夫と考察	63
3.6.1	歌詞譜を用いる	63
3.6.2	イラストの工夫	64
3.6.3	指導内容の手順	64
3.6.4	培った基礎技能の活用	64
3.7	両者の比較からの考察	64
3.7.1	地声の習得児童の割合の差異について	64
3.7.2	長唄らしい歌唱法で表現する度合の等質性について	65
3.8	まとめ	65

## 第4章 実践的展開 I

	伝統的な歌唱を生かした歌唱指導による子どもの音楽的変容	67
4.1	日本語の音声表現を基盤とした声で歌う民謡の授業を通して育つもの 初めての民謡指導「ソーラン節を歌おう」	67
4.1.1	授業者の思い	68
4.1.2	具体的な手立て	68
4.1.3	事前研究会での提案に対する質問・意見	69
4.1.4	学習指導案	70
4.1.5	研究協議会から	72
4.1.6	本実践を、14年後に振り返って	73
4.1.7	一般化できる民謡の指導法	74
4.2	声の使い分けを目指した実践	74
4.2.1	事例の概要	75
4.2.2	第五学年「曲想を生かして表現しよう」の実践から見えるもの	75
4.2.3	評価の考察	80
4.3	合唱部の取り組みからの考察	iii 81
4.3.1	小金井第一小学校合唱部の発足	81

4.3.2	小金井第一小学校合唱部の歩み	84
4.3.3	合唱部のトレーニング	87
4.3.3.1	合唱部の日常の練習	87
4.3.3.2	ヴォイストレーニングに関わってくださった講師	88
4.3.4	伝統的な歌唱を生かした歌唱指導のまとめ	90

## 第5章 実践的展開Ⅱ

### 伝統的な歌唱を生かした歌唱指導における児童の人間的な変容

5.1	いじめをなくし、崩壊学級を立て直した謡の取り組み	92
5.1.1	学級の現状	92
5.1.2	謡の実践の概略と児童の様子	92
5.1.3	謡の実践から見える教育的意義	95
5.2	教育困難校を立て直した伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の取り組み	
	- 《斎太郎節》から、全校長唄《勸進帳》までの実践を通しての児童の変容	95
5.2.1	児童の実態	96
5.2.2	児童変容のきっかけ	96
5.2.3	「弱声の学校」から「豊かな響きのある歌声の学校」に	97
5.2.4	自己肯定感を育てた「勸進帳」5年～中3での取り組み	97
5.2.5	《勸進帳》1年生～6年生の取り組み	
	三味線と鼓の唱歌による全校合奏を加えて	99
5.2.6	「勸進帳」の取り組みによって見られた子供の成長の姿	102
5.2.7	歌舞伎の実践の教育的意義	103
5.2.8	実践を終えて感じること	103
5.3	伝統的な歌唱を生かした歌唱指導のもつ教育的意義	105
5.3.1	筆者の授業観 一本実践研究のベースにあるもの	105
5.3.2	阿部メモから導き出した筆者の授業の原理	105
5.3.3	阿部メモの中にある筆者独自の授業のスキル	107
5.3.4	筆者の授業の原理	112

## 終章 伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義

各章のまとめ	113
結論	116
今後の課題	118

## 資料Ⅰ 授業記録・雑誌記事

iv

1 山内授業記録 2009 阿部みどりによる	119
2 民謡指導の一般化	



これならできる！初めての日本音楽の授業

第7回 自分をもって生まれた声で民謡を歌う楽しい授業・・・・・・・・・・123

第11回 地声と頭声の使い分け「童夢・木曾節」を使って・・・・・・・・・・124

第17回 子どもたちの心と声を開きつなげる「斎太郎節」大漁唄い込み・・・・・・・・125

3 小金井市立小金井第一小学校合唱部紹介

「ポップスから日本民謡まで！子どもたちの千変万化の歌声」

教育音楽小学版 2010 5月号 東京：音楽之友社・・・・・・・・・・126

資料Ⅱ 楽譜

1 「ソーラン節」合唱曲 北海道民謡を基に 山内雅子作曲

「教育音楽小学版」付録楽譜・・・・・・・・127

2 「越天楽によるコンポジション～千年を旅する調べ～」慈鎮和尚作詞 山内雅子作曲

・・・・・・・・・・・・・・・・134

3 「さる地蔵」 山内雅子作詞／作曲

「教育音楽小学版」付録楽譜・・・・・・・・139

4 「夕空から」小金井第一小学校合唱部委嘱作品 秋葉悦子作詞 尾形敏幸作曲

「教育音楽小学版」付録楽譜・・・・・・・・144

5 「こきりこ節」 富山県民謡 山内雅子編曲・・・・・・・・148

6 「童夢・木曾節」 山内雅子作詞／作曲

「教育音楽小学版」付録楽譜・・・・・・・・156

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・161

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・167

論文要旨・・・・・・・・・・・・・・・・169

## 教材・図・表

### 教材

- ・【教材 1】長唄授業で掲示した伝統的楽譜  
『長唄新稽古本 15 節付音符付三味線譜入り花見踊』邦楽社より . . . . . 65
- ・【教材 2】《花見踊》の歌詞譜・筆者作成 . . . . . 65
- ・【教材 3】「花見踊」補助楽譜 . . . . . 65
- ・【教材 4】子どもと担任の先生の謡風問答の台詞・梅野幸吉作成 . . . . . 94
- ・【教材 5】長唄《勸進帳》より「寄せの合い方」鼓と三味線の唱歌譜・山田隆作成 . . 100
- ・【教材 6】《勸進帳》「寄せの合い方」授業で用いた文化譜 . . . . . 101
- ・【教材 7】《勸進帳》より「これやこの～」の部分の歌詞譜・筆者作成 . . . . . 101
- ・【教材 8】《木曾節》の歌詞譜・筆者作成 . . . . . 111

### 図

- 【図 1】 山口明子「洋楽と邦楽における発声法（歌唱法）の相違についての実践的研究」  
高崎短期大学紀要第 1 号 1987 : 91  
「洋楽的な歌い方（リボンの）と邦楽的な歌い方（珠を連ねたように）の比較」  
図の題は筆者による . . . . . 36
- 【図 2】 竹田数章 「声帯振動の代表的なパターン」 竹田（2011 : 1133）より抜粋  
. . . . . 38
- 【図 3】 山本文茂『音楽と教育の関係』「音楽科教育とは何か」 SONARE 1992:17  
. . . . . 106
- 【図 4】 楠瀬敏則『人的な環境』「学校経営と音楽」 SONARE 1992:182 . . . . . 106

### 表

- 【表 1】日本の音楽の歴史の流れ（筆者修士論文より転記） . . . . . 6
- 【表 2】戦前の日本の主な唱歌集とそこに収録された唱歌 . . . . . 11
- 【表 3】学習指導要領，並びに，指導書・解説書にみる発声観 . . . . . 15
- 【表 4】昭和 26 年学習指導要領（試案）の指導目標にみる歌唱に関する記述 . . . . . 17
- 【表 5】昭和 43 年小学校学習指導要領にみる発声の習得階梯 . . . . . 21
- 【表 6】平成 10 年小学校学習指導要領にみる発声の習得階梯 . . . . . 22
- 【表 7】子どもと音楽教師が認識する「頭声」と「地声」の声帯の振動する部分 . . . 41
- 【表 8】頭声的発声評価の平均値（SD） . . . . . 54

【表 9】 歌唱力・頭声的発声評価で5段階評価4以上の児童数 (%)	55
【表 10】 長唄らしい歌唱表現評価の平均値 (SD)	59
【表 11】 地声発声評価で◎と○の児童数 (%)	59
【表 12】 声の使い分けを目指した実践でのそれぞれの声の評価一覧	79
【表 13】 齊藤豊「音楽授業におけるアウトリーチ活動と子どもの学び」	102

## 写真

- 【写真 1】 2003 年 合唱部の前身音楽クラブでのコンクール初参加「特別賞」受賞
- 【写真 2】 声帯観察を行った児童のソロの
- 【写真 3】 和楽器伴奏で、伝統的な歌唱の声で歌う子供たち
- 【写真 4】 2011.10 校内音楽会 小5～中3による『勸進帳』
- 【写真 5】 弁慶飛び六法
- 【写真 6】 ゲストティーチャー花柳忠彦氏と柘・弁慶・義経・四天王役で自信をつけた子供たち
- 【写真 7】 小中教育一貫校開校一ヶ月で鼓笛隊編成。見事にリーダーシップをとった「東っ子」
- 【写真 8】 秋の音楽会 歌舞伎クラブによる幕開けの口上
- 【写真 9】 朗読から歌へ《スイミー》
- 【写真 10】 10-a 三味線 10-b 箏《子供のための組曲》 音楽への関心・意欲・態度は、ほぼ全員がA評価。
- 【写真 11】 口三味線と手拍子で民謡を歌う。
- 【写真 12】 リラックスして、安心して歌える雰囲気づくり
- 【写真 13】 エアー三味線は効果的
- 【写真 14】 ひげダンス唱法で声の響きアップ
- 【写真 15】 和太鼓演奏を、周りの子供が唱歌で応援
- 【写真 16】 和太鼓のアンサンブルで心が通い合う

## DVD資料

- 1 都小音研／音楽授業研究会／研究授業「ソーラン節を歌おう」より 2000 年  
初めての民謡の研究授業。参観者から批判された子供たちが《ソーラン節》を歌う声。  
4年2組 ゲストティーチャー 地域にお住まいの民謡の先生。  
《ソーラン節》北海道民謡
- 2 都小音研／合唱研究会／研究授業 「曲種に応じた声を工夫する」2007 年  
「日本語の音声表現を基盤とした声」で和楽器伴奏で歌う《こきりこ節》 4年1組  
《こきりこ節》富山県民謡

- 3 都小音研／合唱研究会／研究授業 「曲種に応じた声を工夫する」 2007年  
 頭の方に響く声で歌う《山の朝》／「頭声的発声」で歌う《ビリーブ》／  
 リラックスしてそのままの声で歌う《こきりこ節》の歌声。4年1組  
 先輩教諭たちが、この授業内容自体を認めようとしなかった授業での歌声。  
 《山の朝》作曲者不詳  
 《ビリーブ》杉本竜一 詞／曲  
 《こきりこ節》富山県民謡
- 4 「日本語の音声表現を基盤とした歌唱」の取り組みの取材「すなっぷ」より  
 テレビ東京「すなっぷ」（スポンサー 東京都）2009. 1. 21放映より  
「日本語の音声表現を基盤とした声で歌う長唄《元禄花見踊り》、  
取り組みの様子とインタビュー  
 《元禄花見踊り》三世杵屋正治一郎 作曲
- 5 全日音研東京大会ステージ発表より 2010. 10 太田区民ホールアブリコ  
 研究発表の一部と《童夢・木曾節》より  
「日本語の音声表現を基盤とした声で歌う民謡」  
 《童夢・木曾節》山内雅子 詞／曲
- 6 謡の実践【修士論文の成果】  
 導入（担任の先生と子供たちの問答 → 初めての稽古《高砂》  
一人ずつ謡う（自分のもって生まれた声をそのまま響かせて）  
 ステージ発表（正座で、扇をもって所作を守りながら）  
 この実践で心開いて、自分に自信をもって独唱できるようになった子ども達。  
 《高砂》世阿弥
- 7 民謡《津軽甚句》《いつも何度でも》《オブラディオブラダ》  
 ～日本語の音声表現を基盤とした声、そのままの声、頭声的発声を曲想に応じて工夫  
 する授業～ はじめての《津軽甚句》の授業【修士論文の成果】  
 ・《津軽甚句》4時間目 独唱に挑戦  
 ・ゲストティーチャーから、楽曲の背景を教えていただく。  
 ・《津軽甚句》 秋のステージで発表。  
 《津軽甚句》青森県民謡  
 《いつも何度でも》覚 和歌子作詞 木村 弓作曲  
 《オブラディオブラダ》ジョン・レノン／ポール・マッカートニ 詞・曲
- 8 教育困難校で実践1年目、自分に自信のない子、蚊の鳴くような声で歌う子供たちを  
変容させるきっかけとなった《斎太郎節》。

9 歌舞伎《勸進帳》に挑戦

○ゲストティーチャーから学ぶ 口上の指導 花柳忠彦先生 2012. 9

(10月26日 学芸発表会にて5年～中3での舞台上で披露。DVDでは割愛)

1年生から6年生までの長唄《勸進帳》(本町東小学校閉講式アトラクション)

○鼓と三味線の唱歌でのアンサンブルの授業 ゲストティーチャー 山田隆先生

2013. 1 ・1, 2, 3年の授業

○鼓と三味線の唱歌でのアンサンブルの授業 ゲストティーチャー 山田隆先生

2013. 1 ・4, 5, 6年の授業

○《勸進帳》を教室で練習する2年生の子供たち

長唄《勸進帳》四代目杵屋六三郎 作曲

10 渋谷区立本町東小学校閉校式典アトラクション《勸進帳》より

話し声⇒歌う声

口上→「旅の衣は～」→寄席の合い方(唱歌)→「これやこの～」→四天王・弁慶  
飛び六法

11 日本語を話すように歌う 《童夢・木曾節》

パブリックシアターこんにゃく座大石哲史先生の指導

普通に話すときの身体の状態を覚える。構えない。お腹を使い、余分な力を抜く。

《童夢・木曾節》山内雅子 詞／曲

12 曲想にあった歌い方や、声質を工夫する。

イメージに合った声の工夫 《風と人のオペラ》 坂田江美作詞 吉田峰明作曲

13 声帯撮影をした子ども達のソロの声 劇団おとみつくといっしょに

《魔法の笛》より、《夜の女王のアリア》 モーツァルト作曲

14 自然で無理のない響きのある歌い方の声

《この☆のゆくえ》 森 絵都作詞 太田桜子作曲

《夕空から》 秋葉悦子作詞 尾形敏之作曲

15 「頭声」を意識した歌声

《おんがく》 まどみちお作詞 木下牧子作曲

16 鼻腔共鳴を意識した歌声

《もののけ姫》 宮崎駿作詞 久石譲作曲

## CD 資料

- 1 「ソーラン節」 合唱曲 北海道民謡を基に 山内雅子作曲 2006
- 2 「越天楽によるコンポジション～千年を旅する調べ～」 慈鎮和尚作詞 山内雅子作曲  
2004
- 3 「さる地蔵」 山内雅子作詞／作曲 2005
- 4 「童夢・木曾節」 山内雅子作詞／作曲 2007
- 5 「夕空から」 小金井第一小学校合唱部委嘱作品 秋葉悦子作詞 尾形敏幸作曲  
2008
- 6 「風と人のオペラ」 坂田恵美作詞 吉田峰明 2009